

【研究名】：オピオイド製剤のレスキュー使用状況調査

【目的】

がん性疼痛治療にオピオイドを使用する患者さんは、持続する疼痛のコントロールを目的に徐放性製剤を定期的に使用し、突出痛が発生した際に速効性製剤をレスキューとして併用します。レスキューは、定期使用する徐放性製剤と同じ成分の速効性製剤を同じ投与方法で使用するのが原則となっています。

オキシコドン徐放錠は、5、10、20、40mg の 4 規格があり少量から開始することで中度から高度の疼痛を伴う各種がんにおける鎮痛に広く使用できます。また腎機能障害のある患者さんにも使用できることから近年使用量が多くなっています。しかしオキシコドン製剤のレスキューとしての投与量については添付文書上、幅があり愛媛大学医学部附属病院（以下当院）においても統一化されておらず、その投与量が最適であるかどうかも検討されていません。また速効性オキシコドン製剤は散剤しかないため、レスキューとしては水剤や錠剤のあるモルヒネ製剤が代用されることが少なくありませんが、モルヒネ製剤は腎機能が低下している患者さんには注意が必要な薬です。さらにモルヒネ製剤をレスキュー使用する際にはオキシコドン量をモルヒネ量へ換算することも必要です。

そこで、本研究ではオピオイド製剤におけるレスキュー処方の適正使用を促進するため、オピオイド製剤のレスキュー使用状況について調査し問題点を抽出します。

【研究意義】

オピオイド製剤のレスキュー使用状況を調査し問題点を抽出することで、オピオイド製剤におけるレスキュー処方の適正使用の促進が期待されます。

【研究内容】

2012 年～2013 年にオピオイド製剤を使用した入院患者さんを対象に、年齢、体重、オピオイド投与方法・投与量、腎機能検査値などを調査します。

【研究期間】

2014 年 3 月～2015 年 3 月の 13 か月を予定しています。

【患者さんの個人情報の管理について】

厚生労働省「疫学研究に関する倫理指針」に基づいて患者さんのプライバシーを守るよう努めています。結果の発表や出版に際しては個人が特定できるような情報は掲載しませんので、患者さんの不利益となることはありません。

【研究実施体制】

愛媛大学医学部附属病院 薬剤部

教授 荒木 博陽

講師 田中 亮裕

副部長 守口 淑秀

副部長 田中 守

薬剤師 飛鷹 範明

薬剤師 渡邊 真一

松山大学薬学部

教授 岩村 樹憲

特任講師 高取 真吾

学生 原 陽子

【研究結果】

今回の調査では、痛みの評価が統一されておらず評価できないことが分かりました。今後は痛みの評価について統一したルールで記載できるよう取り組んでいく所存です。